



俺がストーリーカーになったのはアイツが ○○○ を ●●● 忘れてたからだ!!

くく登場人物くく

白田 和也 ……相模大野に住んでいる。相模大野校に通う。

酒井 夏美 ……相模大野に住んでいる。相模大野校に通う。和也とは恋人同士。

三春 ノゾム ……相模大野に住んでいる。フリーター。夜勤の仕事をしている。夕方ごろにラ  
ンニングをしているが、小太り、眼鏡、上下の揃っていないジャージ姿の為不審者として噂  
されている。一人称は俺、僕、私。ネットではそれがし。

相模大野町 ……再開発中の町。

「……はっはっはっ……」

夕暮れ時、西の空が赤く染まる時間帯、道行く人の影が長く伸びる。

トンと伸びるとガクンと引っ込み、どんどんと遠ざかる影。

夏も終わりごろとはいえまだ蒸し暑い中、その男は長袖のパーカーを着てランニングをしていた。

フードを深く被り、視線を下げ、時折前に行く人に気付いて不自然に大きく迂回する。

「……はっ、はっ、はっ……」

昨今のランニングブームも下火になり始め、この暑さにも関わらず黒一色を纏う男は異常だった。

最近では町の寄り合い所、子供の集まる場所では不審者に注意の張り紙が張られている。

ランニング男、三春ノゾムは足を止めると、掲示板に張られた不審者注意のポスターを見てちっと舌打ちする。

そのポスターはあくまでも不審者注意とあるだけだが、暗に自分のことを責められているような気がして苛立たせる。

何かしら前科前歴があるのであればともかく、彼の履歴書は大学を卒業以後、真っ白だ。もともと、その真っ白なことが問題なのだが……。

「……はあはあ……」

しばらく走った後、相模大野町の外れにある大柴公園へやってきて、ベンチに座る。

汗だくになりながら額を拭う為にフードを外す。額を拭うとべしよっと汗が垂れ、眼鏡を汚す。

「あーあ……」

次からはハンカチを持ち歩くようにしようと思う。

脇腹の痛みを擦りながら空を見る。雲一つない空。ノゾムはそれが嫌いだっただ。

自分の将来は不安そのもの。暗雲立ち込めるような、今にも泣きだしそうな雨雲ばかりだというのに……。

そんな理不尽な苛立ちばかりを抱くノゾムは不満をぶつくさ漏らす。悪いのは自分の能力を認めようとする世間。本当は自分はすごいのだ。大器晩成。今は充電期間中……。

そんなノゾムは学生の頃、タカと呼ばれていた。理由は自分を顧みずに高望みばかりするからタカノゾム、略してタカだ。

当人はタカ派のようなカッコイイイメージだと思っていたが、卒業後の進路が無い彼に唯一の友達がタカの本当に意味を教えてくださいました。

——ちゃんと就職しろよ……。

余計なお世話だと言った結果、最期の友人も失った。

「くそ……」

余計なことを思い出し、毒づくノゾム。石ころを蹴り飛ばすと、それは思いのほかころと転がり、隣のベンチまで行く。

「ん？ ……あーん？」

石ころが転がって行った先のベンチには人がいた。一人だと思ったら、影に隠れてもう一人居る。しかも男女カップル。

「んだよ、てめー、なんで石投げたんだ？」

白いワイシャツ、グレーのズボン。相模大野校の生徒だ。髪型は短髪でやや脱色されているのでヤンキーに属するのだろうか。

謎の万能感のある年齢のせいか、それとも背後にいる女の子にいいところを見せようとしているのか、はたまたノゾムの風貌を見て舐めてかかっているのか……、全部だろう。

その子は立ち上がり、ノゾムの方へと歩いてくる。

「ちょっと、カズヤ、やめようよ……くすくす」

女の子も一応は止めるが、ノゾムのくたびれた様子を見て舐めているのだろう。明らかに侮蔑の嗤いを浮かべていた。

「あ、あの、えと……その、僕は別に石を投げたつもりは……」

突然のことにノゾムは慌てふためいていた。

「んだこいつ、ボクとかきめーんだよ！」

カズヤと呼ばれた子はベンチを思い切り蹴り飛ばし、大きな音を立てる。

「わ！」

音と振動でノゾムは驚き声を上げる。その様子があまりにも情けなく、二人の嗤いを買う。

「だっはっは、なさけねーやつ……。お前、だせえなあ」

「ねえ和也、やめようよ。かわいそうだよ」

「けどよ、石がもし夏美に当たったら、俺こいつ殺すよ」

「うん、その時はしようがないけどさー。こんなしよぼくれたおじさんにはうちらみたいな幸せなカップルが羨ましいんだよ。うちらも幸せ見せつけすげて悪かったって感じじゃん？ ね、許してあげようよ」

「まあ、夏美がそう言うなら仕方ねーけどよ……。おい、おっさん、今度ふざけたことしたらぶっ殺すかな。覚えてろ」

「え、あ、はい……」

「あはは、はいだって。素直でよかったじゃん。ね？」

「ちっ、夏美が止めなかったらまじボコってたのに……」

「うふふ、喧嘩なんかしちゃだめだってばー」

「だってよお、石を投げてきたし、それに俺らの視界にあんなキモイおっさんが入ってくるとかスゲームカつくじゃん」

「それはわかるけどさー」

「なあ、なっみいー」

「んもう、かずやく」

呆然とするノゾムを余所に二人は向き合って互いに抱き合うといちゃいちゃしだす。

「……おい、いつまで居るんだよ。見逃してやっからとつと失せるよ」

「ホントだよね。空気よめっての」

「……!!!」

ゴミ扱いされることにノゾムはかっと身体が熱くなる。年下の頭の悪そうなカップルに馬鹿にされたこともさることながら、因縁を吹っかけて勝手に勝利宣言をする二人に我慢がでない。だが、プライドだけ無駄に高いノゾムは、人見知りか激しい。誰であれ対面すると上手く言葉を出すことができず、豊唾者のように「う、あ」と呟くのが精いっぱい。

「んだよ、きもちわりいな……」

「ねえ、こいつってあれじゃない？ ほら、最近ポスターとかであるじゃん。不審者注意って奴……」

「ああ、んだな。こいつの恰好ってポスターそっくりじゃん……。夏美ちょっと離れてろ。

今から不審者ぶっ飛ばしてやっから……」

「だめだよ、やばいって……」

そう言いながらも言葉以上は止めない夏美。和也は立ち上がるとノゾムに向かってのし歩いてくる。

「あ、いや、その……僕は……」

「うっせー、この不審者！ ぶっ飛ばしてやる！」

後ずさるノゾムとずかずか距離を詰める和也。そろそろといったところで和也は腕を振り上げて駆け出してきた。

「わあ！ うわあ！」

思わず悲鳴を上げて頭を庇うノゾム。引っ込みのつかない和也はそのまま振り下ろす。力任せとはいえ無理のある姿勢での攻撃は大して痛くも無い。だが、覚悟も無く叩かれたことで痛みとは別にパニックを起こしてしまい、ノゾムは呼吸が荒くなる。

「わあ、わあ！ やめ、うわああ！」

「んだ、この変態が！ ぶっ殺してやる！」

反撃が無い事に気をよくした和也は調子に乗って足を出す。とりあえず足を上げてぶつける程度のせいとか、大した威力にならない。が、ノゾムを怯ませ、気持ちを折るには十分だった。

「やめ、やめてください……たす、助けて……やめて」

叩かれ、蹴られる間にいつの間にかしゃがみ込み、背中を向けていたノゾム。

「……はあはあ、思い知ったか、この変態が……。もう二度と相模大野をうろつくんじゃないぞ。社会のゴミが……」

「は、はい……すみませんでした……ごめんなさい……」

「わー、和也つよい！ 最強じゃーん！」

「なーに、こんな雑魚、朝飯前だったの……」

「うんうん、それでもすごいよ。だって和也、警察でもないのに悪者やっつけちゃったもーん！」

「へ、これぐらいどーってことねーよ」

「和也は最高の彼氏だもん。アタシ、さいこーに幸せ！」

「ああ、お前は俺が守るからな……」

「……………」

しゃがみ込むノゾムは追撃が来ないことにちらりと後を見る。抱き合う二人は夕日をバックに映画のワンシーンでも気取ってか、キスをしていた。

「ひ、ひい……」

逃げるなら今と、ノゾムは必死で駆け出す。だが、突然の展開で足が震え、何度か無様に転んでいた……。

家に帰ったノゾムはシャワーも浴びずに汗だく、泥、草塗れのまま部屋に籠る。  
掛け布団を頭から被り苛立ちと恐怖に震えていた。

——なんだ、なんだよ。俺が何したって言うんだよ。俺はただいつも通りにランニングして、いつも通りに公園で休憩して、石ころ蹴っただけじゃねーか。それなのに人を不審者扱いしやがって……。いきなり因縁つけて殴ってくるお前の方がずっと不審者じゃねーか。お前の方こそポスターに載るべきだろ！ ふざけんな、こんな世の中間違ってる！ 俺は間違ってる。いや、この件に関してだけど、少なくともこの件に関して俺は間違ってる！ 俺は間違ってる。いや、この件に関してだけど、少なくともこの件に関して俺は間違ってる！ 手を先に出して来たのはあいつらなんだ！ 暴力をふるってきたのはあいつらだ！ 手を先に出して来たのはあいつらなんだ。俺が訴えたらあいつら終わりだぞ！ 終わりなんだ。受験に失敗するんだからな。警察に逮捕されて、慰謝料払うんだからな！ そうだ、医者行って診断とってこないと！ 暴行を受けた時はそれを……。

思い立って立ち上がる。どこか身体が痛むだろうか、目を瞑ってしばし考える。膝と肘が痛い。他は特にない。殴られたからだろうか？ 違う。逃げる時に転んだからだ。結構殴られたつもりだったが、どうも違うらしい。

「……………」  
ぐっと手を握り、開いたり閉じたりする。

「……………」  
足を肩幅に開いて半身を下げ、軽く蹴りを出してみる。心の中で効果音を叫びつつ、ぴたりと止める。

「……………」  
背中の後ろで両手を繋ぐ。殴られたはずの背中には特に痛くない。殴られた時は痛くてしようがないと思っていたのに、もう痛みが無い。

「背中は正面の約七倍の強度を持つから……………」  
漫画で読んだ知識をもっともらしく語るが、腕も足も痛くない。

「……………」  
ランニングを続け、格闘漫画を読むことで強くなったのだろう……、などと考えるほどノゾムも馬鹿ではない。

「もしかしてアイツがモヤシなんじゃね……………」  
ひよろりと縦に長いわりにパンチもキックも重さが無く、痛みも残らない。今こうして立っていられるのがその証拠。

「くそ、ビビらせやがって……………」  
そう思うと反撃しなかったことが悔やまれる。ノゾムは拳を握ると布団を思い切り殴る。どすんと重い音がする。当然だ。ネットの動画でボディブローの正しいやり方を見て練習

したのだ。いや、単純に体重が違う。ノゾムはやや肥満寄りだからある程度正しい型を覚えれば重みが乗る。

「くそ、くそ！ てめーなんか、こうして、こうして！」

その日、ノゾムは布団を和也に見立ててワンサイドゲームを脳内で楽しんでいた……。

次の日の夕方、ノゾムはいつものようにランニングをしていた。掲示板には相変わらずポスターが張られていたが、何か書き足されていた。

—— 大柴公園に不審者が出ました。相模大野校の生徒が被害に遭いました。みなさん、不審者を目撃した時はすぐに人を呼びましょう。最寄りの交番へ……。

その追加文を読んでノゾムは再び身体が熱くなった。

被害に遭ったのは自分であり、相模大野校の生徒こそ不審人物だ。

叫びたかったけれど、それをすれば自分も不審者になる。

世の中の無情に咽びつつ、ノゾムはいつもの日課に戻った……。

大柴公園付近に来るとちようどばてて来る。いつもならここで休憩をするのだが、昨日のことがあって遠くからひとまず様子を見ることにする。

広い公園は見通しが良く、時間帯のせいか人もいない。特に念入りにベンチを見るも誰も居ないので、安心して特等席へと向かう。

ベンチに座って一息つく。フードを脱いで額を拭う。汗がだらっと流れるので、それを腕で拭う。汗が目には汗が入り痛い。

「……うう」

ハンカチをもって来ようと思って忘れていた。すると、近くに布があった。ノゾムはそれを使って額を拭い、ことなきを得た。

目を開けて何を手にしたのかと思えば手を見ると、それは雑巾。

3 B サカイ ナツミ

「？」

聞いたことがある名前に戸惑いつつ、元にあった場所に戻す。よく見ると鞆もあった。学生鞆が二つ。一つは女の子らしいストラップがじゃらじゃらついており、もう一つは男物なのか、擦れた箇所が目立つ。

「……ナツミ？」

鞆を見ると氏名のプレートがあり「堺 夏美」とある。もう一方を見ると「白田 和也」とあった。

「和也と夏美……。昨日のあいづらか……」

ノゾムは昨日の悔しさを思い出し、ぎりぎりど歯ぎしりをする。おもむろに立ち上がるとシャドーボクシングを始め、漫画で読んだコンビネーションを繰り返す。

エアークラッシュで和也を圧倒し、渾身のボディブローを決めたところでガッツポーズ……。ふと我に返り、どうして荷物だけがそこにあるのか首を傾げる。

呼吸も整い始めたところで気持ちも冷静になる。周囲を伺うも先に見た通り人気は無い。

「……」  
誰も居ないことを確かめ、ノゾムは再び鞆を見る。ネームプレートには住所欄があるが、空欄だった。当然かと思いつつ、鞆をひっくり返す。すると隙間からスマートフォンが落ちる。慌てて拾い上げると待ち受け画面には昨日見た二人の写真があった。

「……」  
典型的なバカッブルぶりを見て羨ましいという気持ちよりも腹立たしさが強くなる。鞆に戻そうとしたところで指が何かに触れたのか、メニュー画面が開かれる。そこに出たプロフィールという文字に目が行く。

「……」  
個人情報と思いつつ、一方で昨日暴行を受けた手前、もし後遺症が出たら訴える必要があると自分に言い訳し、それを開く。

相模大野町 ● 丁目 × 番地 ▲ 号

数字をさっと眺めて右上にある×ボタンを押してメニューを閉じる。鞆にしまった後、番号を携帯でうち、ワン切りする。通話履歴を登録した後、スマートフォンを鞆に戻し、最初の状態に戻す。

「……」  
持ち主がどこにいるのか不思議に思いつつ、ほっとしたせいで催したのでトイレに向かった。

「んっ……あっ……ああん……はあ……あっ……あっ……んっ……」

「!？」

トイレに向かったところで誰かの声が聞こえた。低く、くぐもった女の声。時折甘ったるくねばっこく耳にかかる艶めきを含む。

「え、え……」

ぱんっぱんっぱんっ……。

ぬっちゅぬっちゅぬっちゅ……。

「あっ、あっ、あっ！ んっ！ はあん！ あ、すごい！ やあん……んっ！」  
一歩近づぐごとに声が大きくなる。

同時にノゾムの鼓動も大きく脈打つ。

「んっ、んっ……んっんっんっ！ ああん！ あん、あん、あん、あっ！」

ちゅばんっ！ ちゅばんっ！ ぱんっぱんっぱんっ！

柔らかいモノがぶつかり合う音。戸板のきしむ音、砂利を踏みしめる音が混じる。それらより鮮明に耳に届く女の子の声、ぶつかる音……。

「ああん！ やあん、やだあ……まって、あんまり激しくしないで……ああん！」

「しかたねーだろ、夏美がエロ過ぎるんだって……はあはあ……うっ……」



「やだ、待って……ダメだつてば、ゴムしてつてばあ……」

「だって、いいじゃん、ちゃんと外で出すから……な？」

「だめえ……ちゃんとゴムしてくれなきゃだあ……」

「……しかたねえな……わかったよ……ほら、してよ」

「ん……うふ、もう、乱暴で我儘なおちんちんちゃんですねえ……ちゃんとお着換えしな  
いとだめでちゅよおく」

「あ……うっ……」

「はい、おーわりっ……それじゃいいよ……ね、きて……」

トイレの外から耳をそばだて、中を伺うと生々しいやり取りが聞こえてきた。

どうやら中では昨日のカップルが行為に及んでいるのだろう。

ノゾムは昨日の腹立たしさも忘れてズボンの中で窮屈になっていたものを自然と弄つて  
いた。

どうするべきだろう。不審な音がするとして通報するべきか？ 中の様子からするとそろ  
そろ終わる。警察が来たとして、お灸をすえる前に賢くなって帰路に着くのが関の山。それ  
より……。

ノゾムは足音を立てないようにトイレの入り口へ向かう。中を伺うと個室からは喘ぐ声と  
肉のぶつかる音、砂利を踏みしめる音が漏れている。

大きめの多目的トイレの戸が閉まっている。赤い文字で閉の文字が見えた。だが、この  
個室は完全な個室になっておらず、天上に隙間があってそこから中を見下ろせるようになっ  
ている。

ノゾムは手洗い台に登りそっとゆっくりと立ち上がる。そして個室内を見下ろした。

「あんっ！ あんっ！ あんっ！ んっ！ んあ！ やあん！ だめ、んっ、あ、いきそ……んっ！ ああん！」

壁に手を付き、お尻を向ける夏美と、それに引っ付いて猿のように腰を振る和也。

「んっ、くう！ やべ……あ、いきそ……」

その動きは緩慢で、一回腰をつき出す度に少しの休憩をはさみ、ようやくトチュンと突く程度。その合間に「あー、あー」と鬱陶しい声を上げていた。

「んっ、もっと、ね、もっとだよお……ほらあ！ はやくう！ かずやあ〜」

「うっ、くう、なつみ……おれ……もう……」

「え……だって、まだ……んっ！ ああん！」

夏美の戸惑いの声を余所に和也は背を反らすように腰を前につき出すと、ふるふる震える。

「あ、やだ……あとちよつとなのにい……んっ、ああん……はあん……くう……」

腰をくいくいねじ込みながら前に出る和也。夏美も軽く達したのか肩を小刻みに振るわせる。それでも「応倒れまいと壁に手を付いた。

「夏美、愛してる……」

「んもう、あたしもだよ、かずやあ……でもお……次はもうちよつとがんばってよお……」

「んっわりい……がんばっからよ……」

「ほんと？ 約束だよ」

「ああ……」

二人がちゅっちゅと唇を交わし始めたところでノゾムはゆっくりとしゃがみこむ。足音を忍ばせ、トイレから出た。

「はあはあ……はあはあ……」

上から見た生のセックスにノゾムは興奮を隠せない。だが、いつ二人がトイレから出てくるかわからず、とにかく走った。そして昨日と同じく転びまくり、砂だらけになりながら公園を出る。

その途中、犬の散歩をしている人がノゾムを見ながら眉をひそめていた。きっとまた不審者情報が上書きされるのだろう……。

案の定、掲示板には書き足されていた。

——大柴公園に不審者出没注意——

デイリーで更新される掲示板にご苦労様と皮肉交じりにぼやくノゾム。今日は別のルートでランニングをすることにした……。

部屋にこもり、ネットを見ながら頭を抱えるノゾム。  
最近、どうも気が逸る。

やたらとオナニーがしたくなる。  
一度抜いて呆けてもしばらくするとまたしたくなる。あまり擦り過ぎては股間が痛くなる  
と自制するも、勃起が収まらない。

何が原因なのだろう。簡単だ。生のセックスを覗いてしまったからだろう……。

生まれてこのかたセックスはおろか、女性とまともに交際したことがないノゾム。周りには硬派を気取って「女はメンドクサイ」とうそぶいていたが、きっと陰で嗤われていたのだろう。

夏美もきつと同じように自分を嗤っていた。

ノゾムをキモイと嗤い、トイレでおらついた彼氏とセックスに興じる……。

年下のカップルがいかに色鮮やかで生臭い性春を送っているのかと思うと悔しくなる。

そして夏美の声が耳にねっとり粘りつく。

はだけたブラウスと、背中が捲られたスカート。かつては同じ場所に通ったことのあるノゾムだが、女の子など遠目に眺めるのがやっと。しかも視線に気づかれるとスカートを押える仕草をされる。

屈辱的な過去を思い出させ、かつ、その生々しさを微かだが見せてくれたこと。

それがきっかけになったのか、ノゾムの性欲は留まることを忘れていた。

「ああ、ティッシュティッシュ……」

ティッシュを取ろうとするも中身は既に空。最近のハードスケジュールなオナニーのせいですっかり使い果たしていたのだ。仕方なく使用済みティッシュを集めてそれに射精する。手に不快な湿り気と粘りを感じた後、一つに丸めて袋に入れる。

「くそ……」

余計なことに気を取られていたせいか、自慰の快感があまり良くない。ノゾムは苛立ち混じりに叫ぶと、黒のパーカーを羽織る。

運動で性欲を抑えられるかという疑問だが、暗い部屋で一人唸っていることの愚かさ、惨めさを痛感し、居ても立っても居られずに部屋を飛び出した。

向かう先はいつものランニングルート……。そうしたいのはやまやまだが、不審者情報を  
また一つ更新させるだけ。

「……そうだ……」

ふと思いつく。余計なことを……。

携帯を開き、ネットで住宅街の地図を開く。

丁目、番地はどこどこ、号まではわからないが、大体の見当はつく。

「あった……」

地図を大きくしてから写メを撮る。町の外れ、大蛇川の傍。そこが酒井夏美の家……。

時は既に午後八時を回った頃。駅近くこそ人の出は多いけれど、町の外れまで来ると寂しくなる。

街灯が照らす中、大きく育ちすぎた蛾がばたばたと羽根をはためかせるのが気持ち悪い。あの下では鱗粉がまき散らされているのだろうと思うと自然と遠巻きにしてしまう。普段自分が周りにされているように……。

「……か……」

酒井の表札を見つけたノゾムは携帯を閉じ、周囲を伺う。

二階の電気がついていることから夏美が居るのだろうとわかる。

ここで戸惑う。来たのは良いが、何をするつもりだったのだろう。

よじ登ってはただの不審者だ。

正面からインターフォンをならしてみるか？　だが、用が無い。

まさか「お宅の娘さんが大柴公園のトイレで和也君とセックスしてますよ」と伝えるわけにもいかない。

だが、このまま何もしないで帰るというのも気が引ける。何かしてやらないと、最近の自慰ループから抜け出せないような気がした。

正面からの観察はあまり得るものが無い。なので裏に回れるかと、大蛇川の方へと回る。大蛇川は過去、大雨や台風の際に氾濫することがあり、相模大野町と鬼瓦村の途中で堤防が整備されている。この下流では沼のようになっており、午後になると釣り人が現れる。

川と堤防の間に土嚢を積めるように通路があり、そこを通って酒井家裏手へと回る。

裏手に回り、まず目にしたのは洗濯物。干されていたのは濃紺のスクール水着だった。

「……」

もっとよく見ようと壁を登ると、何か声が聞こえて来た。

「でさー、今日ってえゝ家に誰もいないんだよねえ……あたしい、一人って怖い……。だからあ、和也、泊まりに来てくれない……？　ほんと？　うれしい！　やっぱ和也って勇気あるよね！　この前だってキモイ奴ぶっとばしてくれたし！　ね、それじゃさ、コンドーさん、あのね、ママのがあるからそれ使おうよ。えー、だってえ、明日休みだよお。一晩で何回できるかためしてみよーよー！　いいでしょー！　ねー、おねがーい！　あは！　あたしってばだいたーん！」

筒抜けの会話にノゾムはどきまぎしていた。

この後、和也がここへ来る。そして朝までセックスをするのだ。

夏美のくぐもった声、快感に絆されてねっとり絡みつくような甘えた声、それでいて男を絡めとるような妖艶さが秘められた声……。

胸が高鳴る。またあの声が聴ける。セックスを傍で感じる事ができる。そう思うともう勃起してしまい、布が擦れる程度でも淡い快感を得てしまう。

今日は既に三回も出したのに……。

「やべ……」

塀を降り、ひとまず通路を後にする。あのまま待っているより、家から何か持ってきた方がいい。

ピンクのジョークグッズとティッシュ。飲み物も欲しい。それと……。

家に戻り、ペットボトルを取る。棚からホコリと陰毛がこびりついたピンクの柔らかいゴムの筒を取り出し洗面台で水洗いする。ノゾムの夜の恋人であり、美琴と呼んでいる。

ノゾムは美琴をタオルで軽く拭いてから中にローションを注ぎ、ビニール袋に入れた。

それとビデオカメラ。証拠を掴むというよりは単純に行為の音を拾って自慰に使うつもりで用意した。

持ち物を二度確認してから鞆を担ぎ、しばし興奮をおさえるためにシャワーを浴びてから夏美の家へと向かった。

日々のロードワークのおかげか体力に余裕があり、思いのほか早く着いた。

家の前には自転車が止められていた。泥除けに貼られたシールに和也の名前がかるうじて読めた。

いくら猿でもまさか来て早々猿のようにセックスをしないだろう。とりあえず裏へ回ってカメラを機動する。周囲を伺い安全を確認してから塀を越える。

夏の間伸び放題の雑草はノゾムの腰まで伸びており、身を隠すに十分だった。

二階の電気が消えており、代わりに二階のスモークガラスに青い光が点滅していた。一階でことに及ぶつもりらしく、都合が良かった。

がさごそと草をかき分けてスモークの近くまで来る。室外機から温風が吹き出され、げほげほと咳き込んでしまう。慌てて口をおさえるが、特に中の様子に変化はない。

耳を壁に押し付けて目を瞑る。

「……んっ、もう……やだあ……えっちい……」

「……なんだよ、そのつもりで呼んだくせに……」

「だってえ……あ、んっ……」

「つか、夏美っておっばいだけーよな……何センチ？」

「ん？ 一応、90かな……」

「へー、90か……何カップ？」

「田だよ」

「まじかあ……田カップか……。な、河合さんとかとおんなじぐらいでかいんじゃない？」

「え？ 河合さん……って、馬鹿、今は私と二人切りなんだから他の女の名前なんて出さないですよ！」

「わりい、ごめん……。でも、おっばい大きいから……気になってき……」

「はー、信じらんない……。あんなおっばいでかいだけの女なんてどうでもいいじゃん。

アタシ萎えちゃったかな」

「なんだよ、すねるなって……ほら、なあ……夏美が最高だって……まじでそう思うし……ほら……機嫌なおせて……」

「んっ、んっ……そうやってすぐ誤魔化す……ああん……んっ……」

「乳首触られるの好きなんだろう……なあ……」

「別に……そういうつもりじゃないし……んっ……ああん……はあはあ……ねえ、おちんちん、だ・し・て……」

低く甘えた声で囁く夏美にノゾムの股間は痛いほど勃起していた。

半被りのチンポが下着の中で捲れる感じがわかる。亀頭の部分がぬるっと湿り、ぴりっとした快感が訪れる。

我慢ができなくなったノゾムはジャージをおろし、チンポを出す。

他人の家の庭でいっだれに見られるかもわからない状況下でのチンポの露出。壁の向こうでは生意気だがおっぱいがでかい年下の女子が胸を弄られている。

その二つの事実がノゾムの興奮をたきつける。

「や、やべ……なんだこれ、スゲー興奮するんだが……」

チンポの先っぽからとろとろと我慢汁が伸び、コンクリートに滴る。少し滲んでゼリーのようになり、泡を見せた。まるでゲームのスライムの元のデザインのように。そう思いながらチンポを握る。

「んっ……はあん……あ……おっきい……んちゅ……あむ……ぺろぺろ……」

「お、やべ……まじか……夏美、なっみい……」

「んちゅぶ……ちゅばちゅば……ちゅう……」

ぴちやぴちやと水の弾ける音が響く。口で何かに吸い付いた時特有の破裂音。時折高く、低く不格好な音が続く。

「くそ、フェラされてやがるのか……。どんなだろう……。俺のも舐めてくれよ……」

フェラどころかキス、さらに言うところ20を過ぎてから女性と触れたことも無いノゾムは、壁の向こうの出来事の絵、感じ方を妄想し妬むばかり。

「はあはあ……んちゅ……ちゅぶっ、ちゅぶっ、ちゅぶ……ねえ、どう？ きもちいいでしょ？ ちゅぶう……ちゅぶうちゅぶう……」

「ああ、いいよ、すごい。あー、いきそ……なあ、出していい？」

「んちゅぶっぶあ……だーめ！」

「なんでだよ、もうちよっとなんだって……」

「だってさっき河合のこと話したもん！ だからお仕置き」

「そんな……ここまできてお預けなんてひでーよ……」

「自分ですればいいじゃん？ できるっしょ？ あたし、男の人が自分でしてイクところ見たいし」

「なあ、頼むよ……夏美い」

寸前でお預けを喰らった和也にざまーみろと嗤いが起きる。だが、このまま和也の喘ぎ声を聞くつもりもなく、夏美に機嫌を直してもらいたい。

「じゃあもう他の女の子の話しない？」

「しないって！ 絶対しないって」

「ほんと？ じゃあ、河合さんも古坂さんもみーんな見ない？」

「古坂って、なんであいつが出てくるんだよ……」

「だって、この前見てたし……」

「ただ、ちょっと珍しいって思っただけだし……、別にああいう暗い日本人形みたいな女はタイプじゃないって」

「本当？ ああいう美少女好きって男子多いし、和也も本当は……」

「ほんとタイプじゃないって。マジだって。それにアイツと俺じゃ釣り合わないじゃん。ああいうお勉強だけできるお嬢様なんて俺みたいなワイルドな男には合わないって。俺に合うのはワイルドでエロイ夏美だって……、まじで」

「ん、本当？ ならいいよ……ちゃんとしてあげる……ちゅぷう……」

「うう……」

ようやく気を取り直した夏美にほっとする。女の子の声で抜きたいのであって、男が射精するところなど観察したくない。胸をなで下ろすもチンポは顔を上げ、そろそろ一回すつきりしたいとだから涎を垂らす。

「……よし、そんじゃ……」

鞆から美琴を取り出し、チンポにあてがう。ローションを温めておらず、やや冷たい。けれど感触はびたりとチンポに吸い付き、ローションでぬるるっと滑る。

竿の根本まで飲み込まれたところで一旦止める。すぐにでも出てしまうのはつまらない。やはり夏美のナマの声を聞いてイキタイ。射精したい。

「んちゅ、んちゅんちゅちゅべろ……んむふう……はあむうちゅ……んちゅ……ちゅ」  
スモークガラスの向こうで夏美らしき頭のシルエットが上下するのがわかる。

じゅっぶじゅっぶと淫らな音を立てながら一生懸命チンポをしゃぶる。

遠目に見て生意気そうだけど結構可愛い夏美。今、ソファに座ってチンポをしゃぶってもらっているのは自分。今チンポを包んでいるのは美琴ではなく夏美の口と妄想し、目を瞑って抜く。

「はっはっはっはっ……はあはあ……うう……やばい……」

「んちゅ、いきそ？ ねえ、いきそ？ んちゅ……いいよ、出して……ちゃんとオクチで受け止めてあげるからあ……ねえ？」

「ん、うん！ 夏美、なっみい！！ あっ！」

「うっ、なっみ……なっみ……」

射精を煽る夏美の言葉に臨み思わず声を漏らし、チンポを抜いていた。

強く握り絞めてゴムの柔らかさ、ローションの滑り具合でチンポを締め上げる。精液を絞

り出して夏美の口の中を汚してやると股間に力を込める。

「あっ！」

「うっ……」

同時に男の声が上がる。

夏美の口の中にびゅっと熱い白い濁り汁が放たれる。

「んっ！ んぶう……ぶぶう……んふうふう……」

口で精を受け止める夏美。喉の奥に行かないようにとチンポの鈴口に舌の裏をあてて受け止める。けれどその量は多く、びゅっびゅと出される内に口から溢れていく。

「んぶう……んっ、やだ、出過ぎだっば……。ていつひゅていつひゅ……」

ノゾムが一瞬の白い虹を構築している中、夏美は口で受け止めた精を出そうとティッシュを探していた。

「んひゅ、ひよっと、ていつひゅ、かひへ……んう〜」

快感に悶えるノゾムの視界では、何かをもつて立ち上がる和也の姿と、それを求める夏美が見える。どうやら和也がティッシュを渡さずに飲ませようとしているようだった。

「いいじゃん、ごっくんしてよ……俺のザーメン、お願い、飲んで」

「いやらっばあ……あーもー……」

ばたばたと走って部屋を出る夏美。その後はどこかのドアを乱暴に開ける音とジャーと流す音が響いた。トイレに吐き流したのだろう。

「べっべ……もう、最悪……。精子は飲み物じゃありません……もう二度とフエラしてあげないんだから」

「なんだよ、冗談じゃん。それにトイレに吐くなよ。俺の精子だぞ……」

「誰の精子でも精子は精子じゃん……」

再び険悪な様子の二人にノゾムはカメラを一旦止める。痴話喧嘩を聞くつもりもなく、そういう雰囲気になりそうもない。

くたびれ損の骨折り儲け……。

そんな言葉がよぎると射精後の賢い頭脳が虚しさをもたらしてくれる。もう帰ろうかと思いが立ち上がると、止めたつもりのカメラが再生され、音が漏れる。

『……！！……！！……！！』

夏美と和也のフエラチオの音が青い光を伴って庭に響く。

「なに？ あれ……」

「……なんだ……誰か居るぞ」

「うそ、やだ！ 怖いよ、和也……」

「だだ、大丈夫だって！ お、俺がついてっから……！ なな、夏美、一緒に来いよ。おれがやっつけてやっから……」

「やだよ、和也一人で行ってよ……」

「いいから来いよ、ほら、な、大丈夫だって俺がいるから……」

慌ててカメラを隠すが既に見つかってしまった。ノゾムは急ぎ立ち上がり、塀に向かって走ろうとする。だが、半分下ろしたジャージに戸惑い転んでしまう。

出しっぱなしのチンポが地面にぶつかるが、美琴がそれを守ってくれる。

「うわあ、美琴！」

叫び、美琴を見るとチンポの代わりに裂け、砂利だらけになっていた。

「おい、誰だ！ 出て来い！ ぶっ飛ばしてやる！」

ノゾムが逃げる後ろ姿を見たのか和也はいきがりだし、サッシを開ける。

「まて！ こら！ うわ！ なんだこれ！」

裸足で軒まで出るが、ベトリとしたものを踏んで尻餅を着く。その間にノゾムはズボンに戻し、塀を掴み、飛び越える。途中、無理やり穿いたせいで美琴がズボンの裾から出てしまう。そしてそのまま大蛇川へと転がり落ちる。途中の枝に引っかかり、ぶつんと二つに裂けた。

「ああ！ 美琴！」

ゴム製品のニックネームを叫ぶも川の流れに任せるままどこかへ行ってしまう。今日まで何度愚息を慰めてくれたのかわからない美琴。今日の潜入探索でも狂おしい程の快感をくれたというのに、その末路は川の流れの行く先々……。

手を伸ばすももう姿は見えない。背後では和也と夏美の音がする。追いかけてこそ来ないが、このまま騒がれては周囲の人に見られてしまう。

ノゾムは断腸の思いで美琴に背を向けた……。